

水琴窟

Suikinkutsu

こころ癒される日本の音風景
静寂の中に広がる澄んだ音色

水琴窟とは

江戸時代初期の著名な茶人で作庭家でもある小堀遠州が創案したといわれる、蹲踞(つくばい)という手洗い場の排水装置「洞水門」から発祥したともいわれている。鉢前水門の下に底に小さな穴を開けた甕を伏せて埋める構造と、手を洗った水が穴から水滴となつて甕底に溜まった水面に落ち、甕中で共鳴するその音色が琴に似ていることから「水琴窟」と呼ばれるようになった。

日本の庭園の最高技法である「水琴窟」は江戸時代の庭師たちが良い音を競って造り、弟子から弟子へと秘伝として伝えられた。そして、時代とともに消え去ってしまったが、近年再び甕、日本の音風景として見直され、ひそかなブームを呼び起している。

水琴窟の音色

甕の大きさ、水の深さなどの絶妙なバランスで、美しい音色が生まれる。

水琴窟の音は「水琴音」と呼ばれ、流水音と水滴音の二つの音に分類でき、手を洗うと流れた水が小石や甕の縁を伝って賑やかに流水音となり、そして穴から水滴となつて甕底に溜まった水面に落ちる水滴音との重なり合う音、やがて水滴音が静かに響く。水滴音は一つとして同じ音はなく、その余韻もまた違ってくる。この水滴音と水滴音の間の余韻も大切である。

